旧東海道五十三次の旅

民旅芸能研究家　椙山　満

江戸日本橋～京三条大橋間、道中125里その中に数えきれない程多くの人達の息吹きと物語りがしみこんだ道。これが私の大好きな「旧東海道」である。

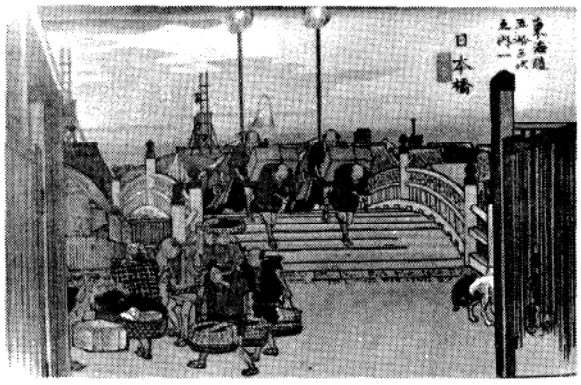
昭和36年に約3000枚のカラースライドでこのテーマを映画化してからもう12年が経ち、昭和44年NHK—TV「こんにちは東海道」で、46年東海テレビ「坂は照る照る鈴鹿は曇る」でブラウン管の中から皆様とお目にかかったこともあります。

さて今日は映像ではなくペンでたどる東海道53次　莫大な資料の中から宿場を代表するものだけをピックアップして京への旅を上ることにしよう。

江戸日本橋 (1)

「お江戸日本橋七ツ立ち」の七つ（午前4時）を知らせた時の鐘が日本橋石町（こくまち）新道（いまの日本橋本町4丁目）にあった鐘で昭和5年に小伝馬町十思公園の鐘楼に移されて現存する。

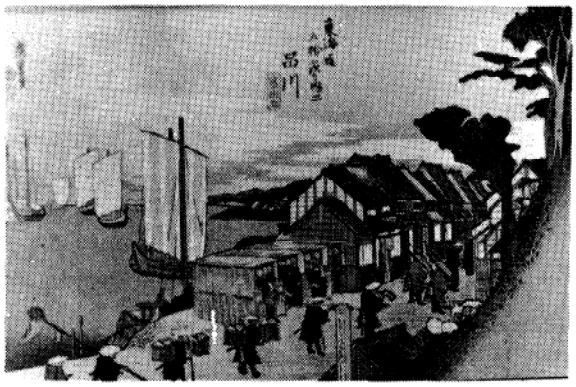
明治以来銀座通りと名付けられた東海道を高輪に来ると大木戸跡。街道の左右に石垣を築き高札場や番屋もあり、旅人は服装を改められたりしたが、茶屋も設けられ、旅立ちする人はここで見送りの人と別れるのが普通だった。都電田町九丁目電停前に草におおわれているのが大木戸のあと。



品　川 (2)

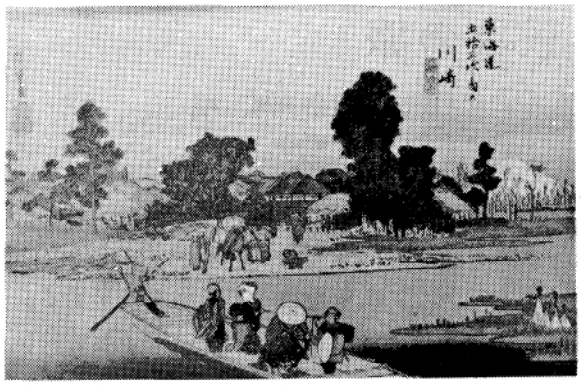
南品川の常行寺には、東海道五十三次とは切っても切れない広重をまつった広重堂がある。少し離れた妙国寺には、切られ与三とお富さんの墓、剣道の伊藤一刀斎、お祭佐七のモデルになった熊木佐七の墓などが、約300年以上の古い墓石と並んで江戸時代を物語る。

大井鈴ケ森の大経寺の隣には、南無妙法蓮華経の題目石に昔をしのぶ鈴ケ森刑場跡が西側にあり、ここで旧東海道は第一京浜国道に合流し頭上には帝都高速道もできて車の騒音に包まれる。ここには文久三年まで番所があった。境内には昔のはりつけや火あぶりの刑に使った台石が残っており、丸橋忠弥や、八百屋お七がここの露と消えた。



川　崎 (3)

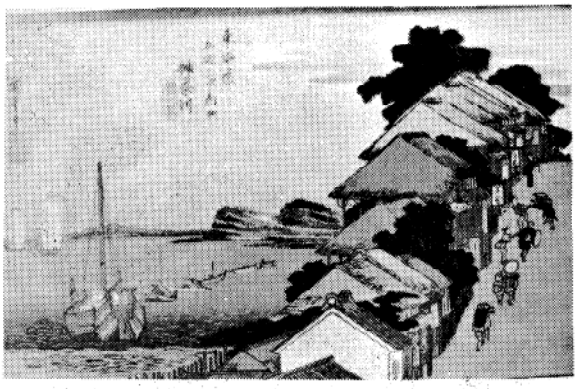
川崎市役所は本陣のあった所という。京浜急行電車の線路沿いで国鉄貨物線のガードの下に「麦の穂をたよりにつかむ別れかな」の碑がある。元禄七年、51才の芭蕉は郷里伊賀への旅に出る。送って来た弟子らとここ八丁畷でつきぬ別れを惜しみ、弟子たちの心をこめた別離の句に返した句がこれで、文字通りこれが門人との最後の別れとなり、この年の秋「夢は枯野をかけめぐる」の吟を残して死去した。



神　奈　川(4)

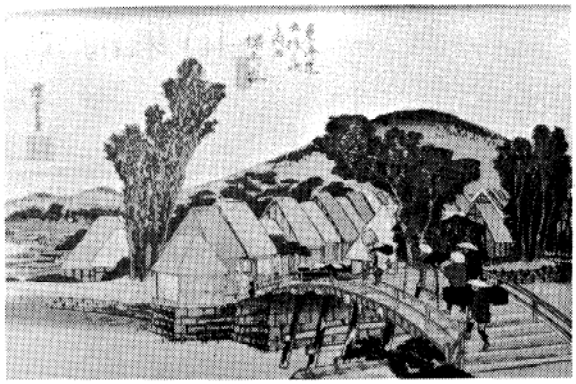
生麦には文久二年島津久光の行列の前を騎馬のまま横切ろうとした英人リチャードソンほか4名を従士が殺傷した生麦事件の碑が、風雲急を告げた維新の夜明けのおもかげを伝える。

神奈川(横浜)の台町の田中家というはたごは、広重の絵にも同じ位置に同名の店が描かれている。このあたりの石垣は、昔の波打ちぎわを物語っており、昔の海の白帆は、今は横浜駅はじめ市街地の人家の波と変った。



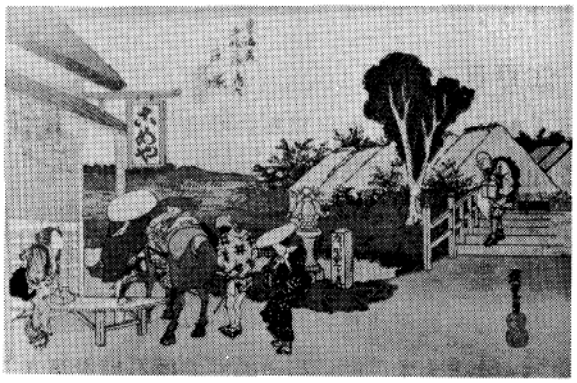
保土ケ谷(5)

保土ケ谷宿のワラ屋根に火災を防ぐという俗信から、屋根にいちはつを植え、五月になると街道筋を白や紫の花で色どったという名残りの家が一軒だけ昔を語り顔で残っている。この宿の西はづれの権太坂(ごんたざか)を登りつめた所に地蔵堂があり、ここが武蔵と相模の元国境で、石灯籠の台石に「武州相州境木」とあり、横に大きなけやきの大木が天にそびえている。昔、旅人はここから眼下に相模の海を眺め、旅の疲れをいやしたことであろう。



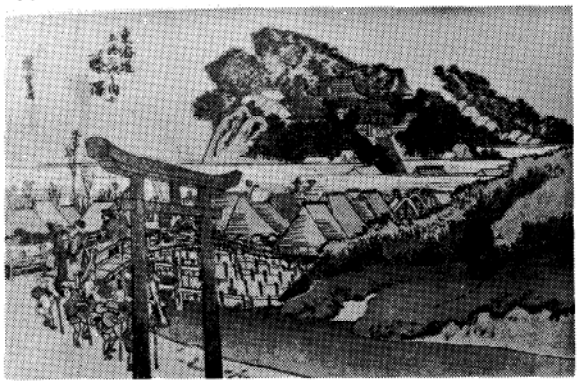
戸　　塚(6)

広重保永堂版戸塚は、仲々旅の情景の濃やかな光景であるが、中央に「左かまくら道」の道標が描いてあり、今も戸塚の柏尾川堤の近く妙秀寺の境内にこの道しるべが保存されている。絵の中にある「こめや」というはたごは、今も同じ場所に子孫が住んでいるが、「こめや」の看板は火事で焼失したというから、惜しいことだと思う。



藤　　沢(7)

戸塚から昔の面影を残す松並木をたどって遊行坂を下ると遊行寺。ここには樹齢約500年の大いちょうの下に悲恋の主人公、小栗判官と遊女照手姫の悲しい物語りと共に、国定忠治の子分で知られた板割の浅太郎の墓がある。



平　　塚 (8)

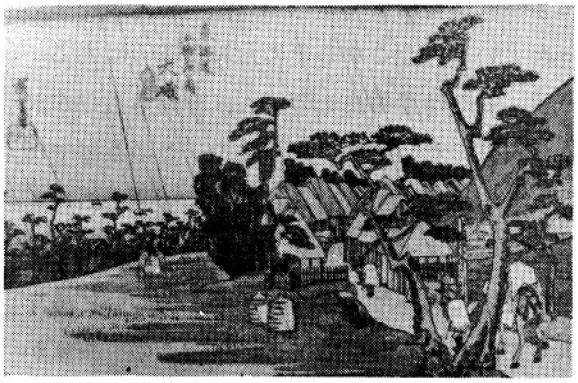
藤沢から東海道は明るい海の反射をうけた空と、市街地をはなれた空気の清らかさを肌にうけて、松並木も所々風情を残しながら茅(ち)ケ崎の一里塚を過ぎる。馬入川の旧橋脚跡を左に、やがて平塚。ここの七夕祭は、町中美しいクス玉と吹き流しで色どられる名物となっている。町はづれの右手に、広重の絵とそっくりの松と高麗山(とやま)の風景がうれしい。

大磯の手前で東海道は化粧坂(けわいざか)となる。昔の道中記に「けわしい坂平地なり」とあり、大体が高麗寺の門前遊廓のあったところからこの名があるとか。曾我の十郎の恋人、大磯の虎御前もここの遊女だったというが、以前はあった虎御前化粧の井戸というものも、国道完成と共に消えてしまった。

大　　磯 (9)

大磯の鴫立沢(しぎたつさわ)は、西行法師の詠んだ歌「心なき身にもあわれはしられけり鴫立沢の秋の夕ぐれ」で有名で、今も西行庵といういおりが残っている。

小磯の町はづれの切通しに石地蔵がある。その昔、この地蔵が夜ごと化けて往来の者を悩ます。紀州の武士がここを通ると美しい女が寄り添ってくるので、怪しいとみて抜き打ちにした。見れば石地蔵の首が打ちおとされていたというので「首切れ地蔵」と名付けられた。

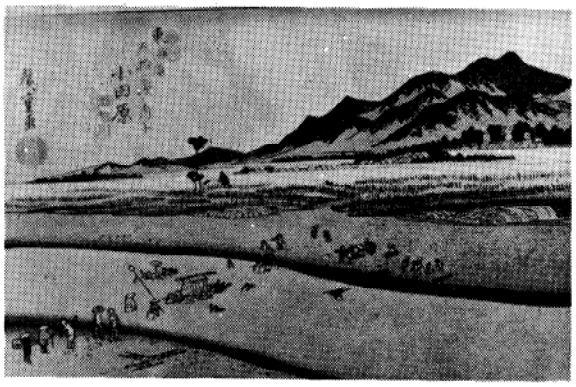


小 田 原 (10)

小田原宿東入口には、江戸口見付と一里塚あとが今も保存されている。

湯本の早雲寺には北条氏五代の墓があり、境内には天正18年、秀吉が小田原攻めのとき石垣山一夜城で使用したという名高い鐘がある。

向いの正眼寺は曾我五郎、十郎兄弟ゆかりの寺で、兄弟の像を安置した曾我堂と、五郎が腕試しした槍突石がある。



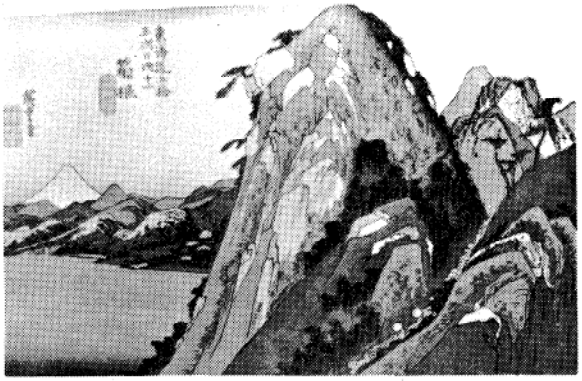
箱　　根 (11)

須雲川橋を渡ると、「女転び坂」といわれる急坂。ここは旅の貴婦人が駅馬から落馬したことから名付けられたという。間もなく箱根の石畳みが連なる。ワラジで歩かないとツルツル滑って歩きにくい。

「樫の木の坂をこゆればくるしくて、どんぐりほどの涙こぼるる」とうたわれた七曲り坂を登りつめると、関口弥太郎の茶店。この人も仇討ちのためここに茶屋を開き、母と共に仇の通るのを待ったが、やっと仇とめぐり会ったときは、仇の男が老齢になっていた為、仇討の心を

捨て、武士も捨てて旅人の世話をして余生を送ったという。ここから更に元箱根寄りにある茶屋。ここは赤穂浪士の一人、神崎与五郎が討入り決行のため江戸へ下る途中、この茶屋で雲助にからまれるが、討入りを前につまらぬけんかをしてはまづいと考え、雲助丑五郎にわび状文を書いて謝ったところ。今もおいしい甘酒を供してくれる（最近のニュースでこの　茶屋が火災で焼失したといわれる）。

この上にまた街道史跡石畳が約１キロつづき、杉並木で芦の湖畔に出る。箱根関所趾には昔の番所が復元され、関所考古館には手形をはじめ東海道53次道中頃の史料が並べてあるので、今通ってきた昔を今一度偲ぶことが出来る。



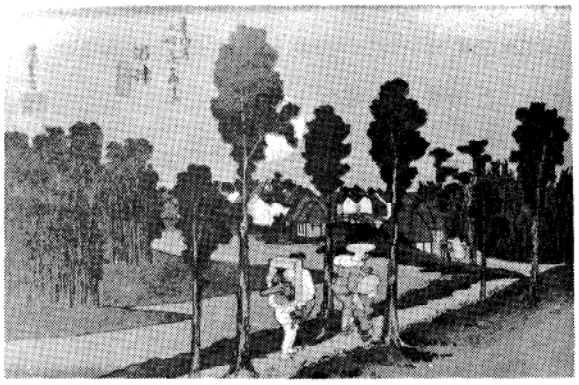
三　　島 (12)

三島神社の大鳥居の前の景は、朝霧にけむる広重の絵がまだどこかに残っている。富士の白雪や朝日でとける、とけて流れてながれの末は‥‥と旅枕五十三次で小唄に唄われた程昔から三島の水の清らかさは評判で、どの道中記にも紹介されていた「千貫樋」は以前は木の樋、今はコンクリート樋で、天文24年、今川、武田、北条の三家の和睦の成立の際、北条家から今川家にに聟引出物として小浜池から長堤を築き、その水を駿河に流通させたというもので、今でいう農業用水。130ヘクタールが恩恵をうけている。

この同じ町内、玉井寺境内に、まだ往年の一里塚が南北とも残っているのは珍らしいが、ここと東の塚原の一里塚の間隔は、正しく一里であるが、西の沼津の日枝神社境内に残る一里塚との間は、一里より近いといったところは、昔一里塚が大体の距離のメヤスに築かれたもので、旅する人に木蔭を与えたものと思えばよさそうである。

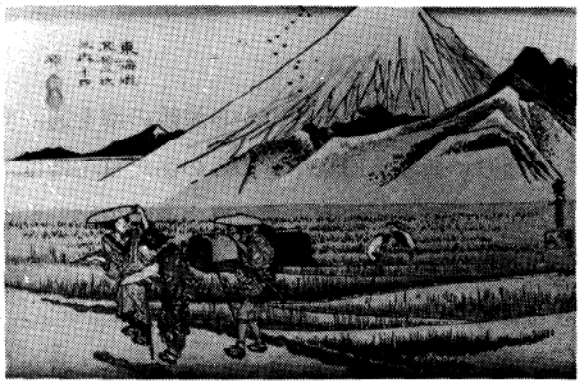
沼　　津 (13)

広重沼津の絵は、私の最も好きな版画の一つで、この場所が黄瀬川ぞいか狩野川ぞいの風景かは、もちろん広重の心にたづねなければわからないが、沼津の旧道には、その心に似たアングルが、どことなく残っているような気がする。木賃宿へ急ぐ巡礼親子と、天狗の面を背にした秋葉詣での人物を配した、たそがれの川岸風景であるが、葉がくれにかかった夕月は白く大きい。まことに叙情性のふかい名画である。



原　(14)

原の本陣渡辺家は、代々平左衛門を称し、頼朝の弟の子孫と伝えられており、当時の玄関が、白隠禅師で有名な松蔭寺にある。「駿河には過ぎたるものが二つあり、富士のお山と原の白隠」といわれる白隠禅師は、ここで生れて84才でこの松蔭寺でなくなったという。昔、この寺に立寄った岡山の藩主池田候が、備前焼きのすりばち数個を贈った。ちょうど松の枝が大風で裂けたので、禅師はこの枝のきり口に、すりばち一つをのせて、雨や日をよけてやったが、この松はそのまま成長して今の「すりばち松」となった。



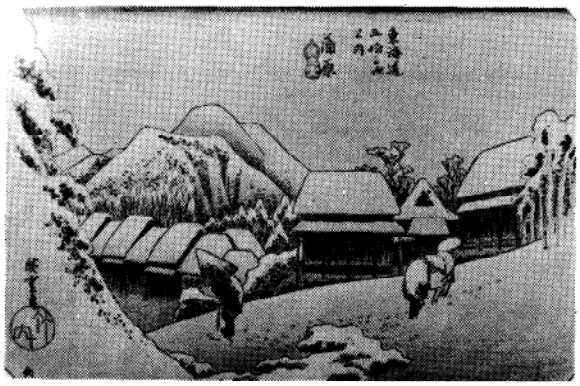
吉　原 (15)

吉原の左富士は、旧道が吉原宿でクランク状に曲折するために今も現存するが、昔の松並木の代りに、工場や家の屋根の向うに見える左富士では、さっぱり情感に乏しい。現場の説明板には「その昔、西行法師が江戸から京へ上る途中この地を過ぎ、眺望の美を絶讃して左富士と名付けたと伝えられる」とある。

吉原から北約4キロ、中比奈町に竹取物語で有名な竹取の翁の何代目かの子孫と称する岡田家がある。同家の横にこんもり茂る竹やぶこそ物語り誕生の故地。竹やぶの中には、かぐや姫の碑という小石が青ゴケにつつまれて埋もれている。

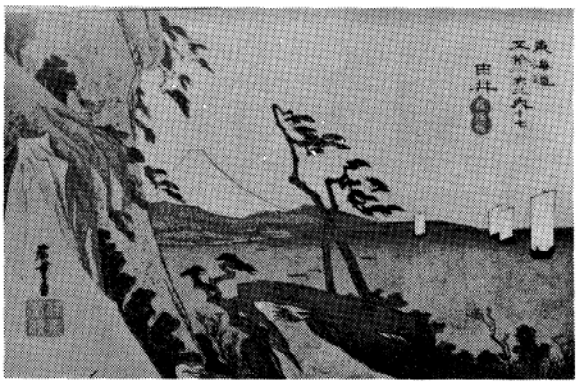
蒲　原 (16)

広重の蒲原の雪は余りにも有名で、米国の美術館から逆輸入された版画があるくらい海外でも尊重されているが、富士川を渡って蒲原宿の旧道を歩くと、岩淵にさしかかる三ツ又路に、大榎茂る岩淵の一里塚がそびえる。道中記に紹介されている名物栗の粉餅を売る茶店はこのあたりにあったというが、それも昔語り。



由　比 (17)

由比の本陣に向い合って慶安の変で知られた由比正雪の生家跡がある。「秋はただ馴れし世にさへもの憂きに、ながき門出の心とどむな」辞世の句を残し自尽した正雪、時に42才。当家は代々紺屋を業とし、正雪を祀る御堂ありと説明にある。広重の由比は、薩埵(さった)峠から旅人が富士を眺める図で、この辺の景観は昔も今も第一。芝居では黙阿弥の「切られお富」にこの薩埵峠の場で与三郎が再会することになる。



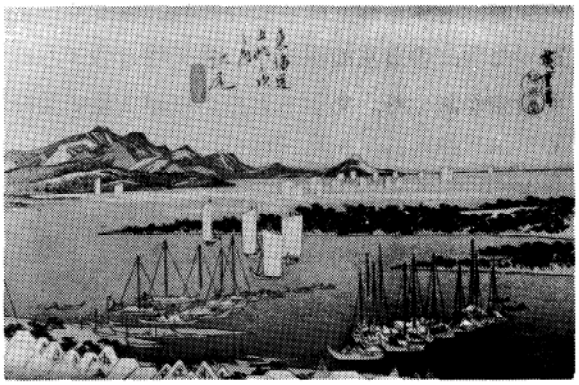
興　　津 (18)

興津(おきつ)の清見寺の関聖禅師は、俗に鮹和尚ともいい、昔、この浦で一丈余の鮹がとれて漁師が煮かけているのを買い求めて、法語を授けるとたちまち蘇って頭を振り立てて海へ泳いで行った。これを清見(きよみ)の長者が見ていて、この和尚こそ菩薩の化身であろうと大檀那となって清見寺を再営したという。清見寺から南に、羽衣伝説の三保の松原が見える。

江　　尻 (19)

江尻は今の清水市。清水の梅蔭寺には、次郎長親分や大政、小政の墓、山岡鉄舟に関する資料が保存されており、梅蔭寺の前の民家に「次郎長の生家」というのがあり、ここを訪れる人も多い。

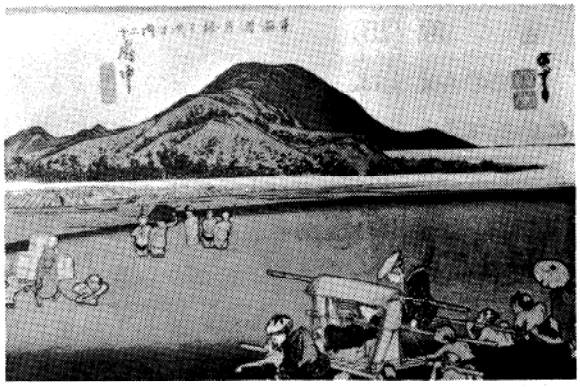
郷土人形デッコロボーのいわれの発祥地「稚児橋」から西に向う道ばたに、清水十八人衆に討たれた遠州の都田吉兵衛の供養塔が建っていた。この先草薙は日本武尊が賊の放った野火に囲まれ、天叢雲剣で草をなぎ払ったという伝説の地を過ぎる。



府　　中 (20)

府中（静岡）の伝馬町から城跡の南を通って本通りに通ずる旧東海道のこのあたり一帯は、名物の花町で、広重の画「府中遊廓の図」もここから安倍川よりの二丁程の景観を描いたものと思われる。

安倍(あべ)川のたもとにある「石部屋(せきべや)」は、昔から名物としられた安倍川餅のしにせである。



（次号につづく）